第六十九回O先生賞・選考座談会

可能性への挑戦

出席者　桑原正紀・津金規雄
大野英子・大西淳子

桑原　これから第六十九回O先生賞の選考座談会を、昨年同様メールで回覧する形でやっていきたいと思います。選者の皆様よろしくお願い致します。今年は最初の投票で票のばらつきの幅がかなりあったため、それをふまえて再投票ということになりました。その結果が次ページに一覧表として提示してあります。波瀾の幕開けとなりましたが、この座談会では、まず一覧表の上位の作品について、次いでそれ以外の注目作についていろいろと意見・感想を述べ合い、最後に受賞作を決定するという流れで進行していきたいと考えております。

上位五篇をめぐって

桑原　それではまず**斎藤美衣さんの**「蚱蟬」について、一位に推しておられる津金さん、よろしくお願いします。

津金　三十首をまとめて詠むという機会はなかなかないので、やっぱり一定のテーマを設定するのが、作者にも読者にも良いのではないかと思います。斎藤さんの一連は〈被曝二世だから病を得たのかとかつて二人に問はれし夏よ〉とあるとおり、原爆それも〈被曝二世〉という立場からこの重いテーマを引き受けて、強い読後感を与えてくれました。構成としては日常詠をまじえてちょっと混沌としていて、それがまた面白かったです。

桑原　ありがとうございました。私も一位に推しています。津金さんが言われたように重いテーマを持った一連です。自らの病気をテーマにした作品は割と多かったのですが、十代の頃からの自分史に絡めた時間の厚みが他に類を見ない重さや深刻さにつながっています。〈鞄には抗癌剤と受験票　かまぼこ坂をわれは上りき〉という受験時の思い出の歌には強い衝撃を受けました。しかし、終りの方の〈われがまだ産むなら楽器、明け方の空の遠(をち)までカノンひびかせ〉や、〈にんげんはほんたうはよいものでせう塩壺にまた塩を足したり〉など、前向きで光を帯びた歌に救われました。そういう面での構成への配慮もよかったです。

大西　原爆、病、生死などの重いテーマを自分に引きつけ、詩に昇華しています。「八月六日」という詞書のある〈ひろしまの蟬の鳴き声イヤフォンの奥より迫るおほ波のごと〉は、イヤフォンという現代的なアイテムにより実感を伴い、波に

喩えたことで迫力とスケールが増しました。一方、タイトルとなった〈被曝樟みづに降下すこゑ持たぬ蚱蟬ひとつ止まらせたまま〉の、被曝樟は五百前に「長崎、山王神社」と詞書にある長崎の樟のことで、蚱蟬は発音器官をもたない蟬なので鳴かず、対比が巧いと思いました。生死にかかる歌では〈この夏を生きてゐることを確かめよ　あかるい店にサンダルを買ふ〉の下句の具体の中にあるア音の繰り返しや〈喪服着る生者のからだ喪服着ぬ死者のたましひ　はちぐわつさみし〉の対句表現、ひらがなのバランスなど絶妙だと思いました。

大野　皆さんのご指摘通り、テーマも明確で一首一首は完成度が高く、大西さんが挙げられた作品の他にも〈朝の息ひしめく車両運ばれて連結をする八時十五分〉〈二番線ホームの隅に活けられし菊はきのふのすずしさ保つ〉など、出身地である広島の原爆記念日の朝、地元の友人とスマホでその時間を共有する姿など、一連としての摑みも良く、終り方にも希望を感じさせています。三位に留めたのは中盤の過去の病に触れる作品あたりが、作者には見えている思いが、作者の背景を知らずに読んだ読者には見えないのではないかという思いに、隔靴掻痒の感が拭いきれず、この順位に留まりました。

津金　大西さんが挙げた〈この夏を〉の歌は明快で私も丸をつけました。一方で〈被曝樟〉の「みづに降下す」の解釈には幅を持たせているようで、こうした歌がいくつかあって、先ほど「混沌」と言ったのもそんなところからです。重大なテーマであるだけに、あえて一読了解されてしまうような行き方を選ばなかったのかな、とも思いました。

桑原　そうですね。津金さんはやさしく表現されましたが、解釈に幅があるということと解釈が揺れるということは微妙に異なり、後者のケースが目につくよう

第69回O先生賞優秀作品順位表
（1位作品を10点とし，10位作品を1点とする）

題名	作者	桑原	津金	大野	大西	合計	順位
蚱蟬	斎藤　美衣	10	10	8	9	37	1
猫屋敷	白川ユウコ	7	6	9	6	28	2
小さな乱気流	椎名　恵理	8	9		10	27	3
与力の憤怒	水辺　あお	4	5	10	4	23	4
リモート・リモートワーク	清水　美里	6	2	7	8	23	4
走るこころ	三沢　左右	9	3		5	17	6
繭なかのつう	奥　呂美生	3	8	3	3	17	6
舅姑の息	印出美由紀		4	5		9	8
春も失ふ	山崎　洋子		1		7	8	9
アフガンの蝶	内藤　丈子	5		2		7	10
その下に居る	樋田　由美		7			7	10
五十鈴川の鴨	末広　芳子			6		6	12
過ぎてゆく日々	都甲真紗子			4		4	13
白馬ヴィヴァルディ	稲吉　裕子				2	2	14
揃ひの指輪	山口　照子	2				2	14
大祖・鎌倉北条氏	北条　忠政			1		1	16
去つてゆく夏	栗山　由利				1	1	16
鳥	秋野　愛実	1				1	16

桑原正紀氏

にも思いました。つまり、まだ粗い表現が散見されるということです。ただそれは、自分にとって避けて通れない重いテーマであるがゆえに、まだ言葉との折り合いがついていない部分もあるからなのだろうと受け取りました。

それでは次に、二位の**白川ユウコさんの「猫屋敷」**に移りましょう。最初に大野さん、お願いします。

大野　ご両親の家の断捨離をされる一連です。タイトルから、猫を絡めてゴミ屋敷問題だけでなく孫を抱かせてあげられない心の屈折と罪悪感が伝わります。実家に文鎮を探しに行く一首で始まり、断捨離後も楽譜の行方を言う母で終るところが静かに響き合い、血筋のユーモアを感じさせる工夫が感じられました。

津金　一連の内容は大野さんがまとめてくれたとおりで〈一軒家娘二人が嫁に行き家をとりまく猫の一族〉にそれが表れています。〈孫代わりと母に呼ばれる雄猫がわたしの脚をひょろんと跨ぐ〉には作者の複雑な気持ちがあるでしょうし、読んでいるこちらもちょっとやるせないです。大野さんは「ユーモア」と言ってますが、苦いユーモアですね。『吾輩は猫である』の苦沙弥先生を連想してしまうのは考えすぎでしょうか。

大西　実家の仏間をめぐる歌にたくさん丸がつきました。〈おりふしに「わたしは孫がいないから」母のつぶやく仏間の狭さ〉は、心の圧迫感を「狭さ」で表現しており、良いと思いました。〈父に部屋、母に部屋あり物置と成り果て二人仏間に憩う〉は、居間じゃなく仏間というのがいいですね。また〈三畳の納戸の中身八畳の仏間に出せば八畳の山〉は、数詞が効いていると思いました。

更に、独自の文体を獲得しているのが持ち味と言えます。〈しまい込むことは大事にすることと違いますわなノリタケチャイナ〉〈仏壇はかわいくないなかわいいの買って今のを燃やしたいなあ〉等です。仏壇の選択基準が「かわいい」である歌に初めて出会いました。ただ少し歌が軽くなってしまうので、重石のような歌がもっとあればよいと思いました。

桑原　皆さんと同様、好もしい一連と読みました。二首目の〈夫の手をときどきはずし四十六歳手ぶらで帰る静岡の家〉も、子供の居ない夫婦の関係性や実家との気楽な距離感などが伺えて、おもしろいと思いました。白川さんの歌は軽妙で、身めぐりの素材をさくさくと歌にしてしまう才を感じます。ただ、それが過ぎると歌い流している印象につながります。この一連でも父や母が捨てられないでいる物の歌や、それをサッサと片づける自分の手際に関連する歌がやや軽すぎて多すぎる印象がつきまといます。最後の二首、〈父いつか母いつか去るひとつひとつ小石を積んだこの世を去るよ〉〈讃美歌の楽譜はどこと母が言う行方知れずのままのグロリア〉のような歌は違っていて、軽い読み口だけれども深みを感じます。

大野　お二人のご指摘のように軽さは否めませんが〈引き戸あけまた引き戸あけ

襖あけテレビの前の母にただいま〉〈風呂場の戸をサッシ扉に替えさせた木枠腐って戸車とれて〉〈三畳の納戸の中身〉など、言葉をずらしながら繰り返して展開するリズムが、説明にならずに重いテーマをテンポよく読み進めさせていると感じました。中盤から断捨離する品々と格闘する作者がスピード感を持って詠まれています。その最後の方に〈春の川みていたわれの乳母車ゴミ袋積み八往復す〉は川を見ていただろう作者を乳母車に仮託し、こんな使い方をする日が来る寂しさ。最後から二首目の〈父いつか〉の無常感が一連を引き締めて、独自の世界を作り上げています。

津金　軽さが話題になっていますが、それによって救われているものもあるかと思います。扱われているモチーフの性格上どうしても全体のトーンが不機嫌になりがちなのですが、軽さがそれを中和しているようにも思えます。

津金規雄氏

桑原　ありがとうございました。それでは次に**椎名恵理さんの「小さな乱気流」**に移ります。大西さん、お願いします。

大西　はい。「産む」という性を持ち、またそれを望みながら、リミットが近づく焦燥感。大胆な表現もありますが、私は現代短歌に対する挑戦であると評価しました。〈冬眠のごとくおだやかなり銀のGODIVAの缶の中の避妊具〉が一首目です。入りから四句までは、柔らかく美しいのですが、結句にインパクトがあります。難しいテーマですが、景も明瞭で詩に昇華できていると思います。〈「赤ちゃんがいます」のキーホルダーずっとずっと遠くにある優先席〉は、望んでいるという感情を、遠いという距離で表現しており、良いと思いました。

　また、人間関係の傷がもう一つのテーマとしてあります。〈後悔は二つあるんだ地下鉄に忘れた傘と無視した手紙〉は、後に佐渡島に引っ越した友との文通であると分かります。

　最後の歌〈人間をきれいに抱くため人間の関節は海に向かって曲がる〉は、性愛、友愛すべてを包み込むようで、収め方も良いと思いました。

津金　三十代半ばの女性にとって大切な問題である「性」に立ち向かっていると思います。〈母が知る二人と知らぬ幾人に抱かれた身体にクリームをぬる〉など大胆ですが、下の句の具体性が生きていますね。でもこうした歌ばかりではなくて〈ヘルメットのおおきさの西瓜いれるためヨーグルトには出てってもらう〉といった、ちょっととぼけたような日常詠も魅力的です。大西さんのあげた「傷」は人間関係もふくめて、全体を貫くものなんじゃないのかなとも思いました。

桑原　私もかなり高い評価をした一連です。微妙な年齢の微妙な感覚が、豊かな素材に託されて巧みに表出されている歌が多いです。上がっていない歌では〈また鼻のほくろがすこし濃くなった昨日だれかを傷付けたみたい〉〈椎茸にバッテンつけて鍋に入れ伏せ字のような夕方にいる〉〈戦争を遠く眺めるビリヤード場のスロットマシンのわたし〉などもいいですね。ただ、〈戦争を〉といった歌が

あれば、中程のビリヤード場での歌は無くもがなと思いましたし、そうした軽い歌が何か大切なものを削いでいる印象が若干の減点につながりました。

大野　傷のない一連だとは思いましたが、一、二首目は重い内容ながらも、その後はとりとめのない日常詠が多すぎて物足りなさを感じました。先に挙げられた〈「赤ちゃんがいます」〉〈椎茸にバッテンつけて〉の他にも〈五回分なくなり十回分なくなり排卵検査薬、また買う〉〈ゆで卵とチェダー詰まったゆりかごのような揚げたてカレーパン食む〉のような心の屈折が窺える作品がもっとあればと思いました。一読した後に、テーマ性が淡くしか残らなかったのが残念です。

大西　〈ヘルメットの〉の歌の西瓜とヨーグルトは、人間関係の喩と読めると思います。また、中程のビリヤード場での歌ですが〈右の台の恋人たちのからかいは喧嘩に変わるキュー拭きながら〉は、そういう些細な感情のもつれが、やがて戦争につながるという、布石ではないかと思いました。日常の中にあるものが様々に絡み合って一連を構成しているのだと読みましたが、私の深読みかもしれません。

桑原　はい、それでは続いて四位の**水辺あおさんの「与力の憤怒」**に移りましょう。まず大野さんお願いします。

大野　賛否を持って語られる、幕末の大塩平八郎の乱を題材に歌物語風に仕立てています。タイトルからも伝わるように、徹底的に平八郎の怒りに焦点を当て、判りやすく背景となる当時の社会情勢を伝え、平八郎の行動に臨場感があります。〈学問は偉いがめつぽふ癇癪もち塾頭怒りて干し魚齧る〉これは森鷗外の小説の中での平八郎の人物像を語る部分をご自身の言葉で再構築しています。

〈開け放つ座敷の向かう朝風にしばし吹かるる石蕗の花〉〈延命か自刃かすでに意は決し上げし額は朝焼けに照る〉〈つむじ風さへぎるものなき町々をくまなく照らす白き月光〉等、場面が映像化されるようなリアルさが演出されています。ご自身の思いは徹底的に排除した詠みながらも最後の歌〈将軍も貧農も消ゆさりながら今に生まるる困窮の人〉から、この一連は与力の憤怒が現代社会、政治に対する作者の怒りとして仮託されていることが伝わって来ました。タイトルの「与力の憤怒」を結句にいれた歌が三首あり、幕府に対する怒り、貧民を思う怒り、反乱が失敗に終る怒りと使い分けが明確なことも印象的でした。

津金　一首目に〈東町奉行所与力平八郎日々目にしたり餓死の骸を〉とあって、大塩平八郎の乱を詠んでいると分かります。以下ドキュメンタリータッチで三十首が展開しますが、大野さんの指摘どおり主観を打ち出さず、ひたすら事件の展開を追っています。歴史的な用語が多くて、逆にカタカナが全く使われていないのも特徴的ですね。最後の一首で現代社会との繋がりが示されますが、個人的にはこうした歌が途中にもっと挟み込まれた方が、アクセントにもなり、読みやすくなったんじゃないんでしょうか。終り

大野英子氏

に近い〈私心なき滅びはいつも新しきはじまりを生む炎のなかに〉には、控えめな思いがにじんでいますが。

大西　史実を元に三十首詠まれたのは、力を感じます。政治の腐敗と汚職、貧困など現代に通じるテーマである点も評価します。〈米麦を安く叩いて高く売る豪商の耳、ふくよかな耳〉は、耳に注目して詩に昇華できていると思います。〈かけつける農民、町民たちまちに七十名が三百余名〉は、畳みかけるようなリズムで疾走感があります。しかし、実際にあった出来事であるため、それをただ三十一文字に収めただけでは説明となってしまい、もったいないと思いました。

桑原　私も惹かれた一連でした。ただ、こうした素材はどうしても事実を骨格に

大西淳子氏

しなければならず、それが説明臭につながるというハンディがあるので、賞の審査対象としては損をしがちです。作者もそこは承知した上で、今の時代にこれを作っておきたいと思ったのでしょう。やむにやまれぬ思いが伝わってくる作品群で、たとえばこれが歌集の中などにあるとひときわ存在感のある一連になるはずです。そういう意味で、これはこれで評価のできる一連です。

それでは同じく四位の**清水美里さんの「リモート・リモートワーク」**に移ります。まず大西さん、お願いします。

大西　コロナ禍の新しい働き方をテーマにしており、素材の新しさが光る一連でした。〈穴掘ってまた元どおり埋め戻すみたいな仕事〈嫌いではない〉〉〈人力でリストアップすAIに奪ってもらえそうな仕事を〉等、結句のカッコや、AIに「奪われる」ではなく「奪ってもらえそうな」という表現に心の屈折があり、迷いながらも矜持を持ってお仕事されているように感じました。しかし、仕事に苦悩はつきもの。〈ここにいぬ人に叱責されていて電気信号化される謝罪〉叱責も対面でなく、謝罪もメール等の通信機器を使ってするのを「電気信号化」と表現したのが巧いです。〈注：「できる」には「追い込まれ這いずってなんとかできる」も含んでいます〉には、二重丸をつけました。注意書きをモチーフにほぼ定型で詠んでおり工夫が感じられます。

大野　子育て中のリモートワークを通した日常を詠み、新しい働き方も新鮮でした。〈コミュ力に自信ないから丁寧に受け応えをすゆっくりおおきく〉〈穴掘ってまた〉など前半に作者像が定まるのが良いですね。〈感じない訓練を積み重ねその重みにふいに足を取られて〉入会間もない作者ですが、句跨りも自在に、この一首では心の軋みが伝わってきます。タイトルでリモートを二度繰り返すのが不思議でしたが「五本目のリモート会議」という歌もありタイトルとなった歌から終りなく続くような大変さが伝わり納得しました。〈社会的治癒と治癒との間には日々がとぐろを巻いている　歩く〉〈頑張ったわねと主治医がほほえんだ　また頑張ってしまったわねぇ〉現在も治療中の病の社会的問題をさりげなく提示する詠みもお上手だと思いました。

津金　「与力の憤怒」とは対照的にカタ

カナがとても多いですね、数えたら十六首ありました。そして全体を通して話し言葉を駆使しています。何十年後かの短歌の世界はみんなこうなるのかな、とも思いました。文語の魅力から離れられない私などからすると、どうしてもそこに単調さを覚えてしまうのですが、時の流れからすると仕方のないことなのかもしれませんね。とはいえ〈予備のコピー用紙に埃うっすらとペーパーレス化の成功を知る〉は、まさに時代の変動のさまを身近なところからきちんと捉えていますし、〈スプーンを挿せばむちっと手応えのあるプリンまだ寝てはいけない〉のミステリアスな感覚には心惹かれます。

桑原　多くの方が重いテーマ性のある連作に挑んでいる中で、この作品は淡々とした日常詠で構成されています。しかし読者を飽きさせない多様な表現力が感じられる一連です。もう自分の文体を持っている作者ですね。〈そこにある全ての時計ずれている虹薬局の月曜の朝〉〈どん底のやや上空にハンモック吊って見てますNetflix〉〈とりあえず子は育ってるアサガオは枯れたし爪は伸びすぎだけど〉等々、不穏で不安定な気の漂う日常を詠んでいますが、不要に落ち込まず昂揚もせず、いわば〈平熱〉を保ちながら詠んでいるところに独自の平衡感覚を感じます。まだ入会間もない作者ですが、かなりな力を感じますので、これからが楽しみです。

六位から九位の作品について

桑原　それでは以下、六位からの作品をめぐって評をいただきます。まずは**三沢左右さんの「走るこころ」**について。これは私が最初に述べましょう。

すべて日常に取材した一連ですが、単純な日常詠ではなく、背後の精神性にむしろ主題のある歌が多いですね。〈にはかあめレインコートの首を打ち悪事果たししわれと思ひぬ〉〈アンケートどう答へても角が立ち自分好みの角を立たせる〉〈笑ひゐしわが失敗を夢のなかわがくりかへす笑ふことなく〉〈男性に男性の声ありながら〈地声〉とふこと思へり葉月〉〈ゆびのあと二本分つく小説の装丁黒し海石のごとし〉等々に長く立ち止まらされました。簡単には言いがたい、生にまつわる違和の表出がうまい作者ですが、分かりづらい歌と逆に分かり易い歌とがあって、全体としてのバランスが少し悪かったかもしれません。

大西　丸をつけた歌がたくさんありました。〈アンケート〉の歌は感情の紆余曲折があり、私も良いと思いました。また〈タッパーが四匹甲羅干ししたる吸水マットに昼の陽の射す〉の見立てや、〈長針が短針を追ひ抜かすとき目礼くらゐしてをるだらう。〉の擬人、〈われに背を向けて絵を描く君なれば後ろよりさしのべて絵に触る〉や〈熱もちて手のひらすこし太りゆく気のせりきみと手つなぎをれば〉の相聞など、それぞれ良いと思いました。背後の精神性は感じられるものの、一連を貫く明確なテーマが見えづらく、おしいと思いました。

津金　〈アンケート〉の歌は私もいいなと思いました。他に〈びしびしと洗濯物の背を打てば劣情のなき右の掌〉〈はつきりと言ひたきことばわがうちに無ければ酒を咀嚼してゐる〉などもユニークです。外界にあるものをいったん自分の内に取り込んで、独自の加工を経たのちに提出する、という知的な操作が際立つ作

者ですが、それが分かる歌と分からない歌の両極化を招いているのかもしれません。恋の歌でも、どこかひんやりしているのが興味深いですね。

桑原　それでは同じ六位の**奥呂美生さんの「繭なかのつう」**にいきましょう。まず津金さんお願いします。

津金　題名は〈『夕鶴』のつう思はする繭なかの影はほそりてなほも糸吐く〉から取られています。民話「鶴の恩返し」をもとにした木下順二の戯曲『夕鶴』のヒロインつうになぞらえて、蚕の一生を歌っています。どちらも自らの命を削りながら人間に尽くす点が共通していますが、蚕はつうのように恩を感じているわけではないので、そこはぴったりしませんが。〈ある人は〈おかひこ様〉とある人は〈虫〉とよぶこの桑を食むもの〉から分かるように、人間の都合からその生を左右されているものへ注がれる、優しい眼差しが伝わってきます。

大西　蚕蛾に『夕鶴』のつうを重ねる発想のおもしろい一連です。〈まどかなるまゆが宿せしその中にあるやも知れぬセピアの勾玉〉など、滑らかな韻律と柔らかい表現に注目しました。ただ、同じ強さで三十首置かれているので、強弱をつけたり、他の要素を含んで変化をつければもっと良くなると思いました。

桑原　一首一首に思いの籠もった力作が並んでいます。〈初夏にひと日休まずさはさはと桑の葉食める蚕時雨たかし〉〈あらそひのあふるる今をあさなさなあらそはず食むかひこは桑食む〉等々いい歌がたくさんあります。ただ、大西さんがおっしゃっているように、一連全体が均質なのですね。一首一首の完成度は高いのですが、全体としてぼやけた印象になってしまいました。何気ない日常詠や叙景歌などでアクセントをつけるとまったく印象が違ったでしょう。でも、期待できる作者です。

それでは次に**印出美由紀さんの「舅姑の息」**について、大野さん、津金さんお二人にお願いしましょう。

大野　私は六位に推しています。夫の、今は亡きご両親と洗礼を受けて三年を過ごしたのみの生地、折戸を訪ねる一連です。新婚当時のご両親の慎ましい暮しぶり、当時のままの団地や教会の細やかな描写から懐かしい昭和の景が立ち上がって来ました。〈をさなき日きみが母ごの背で聞きし月がゆつくり潮を曳く音〉〈新婚のわれらを訪ひて発ちぎはにわが肩にふと触れし舅の手〉情感と体感のある歌が一連に陰影をつけています。夫の視線では「ちち」「はは」と表記を変える工夫がされています。ただ翁や息子に息、息というルビに頼らない工夫が必要です。表現の古さが残念でしたが理知的で魅力的な詠みでした。

津金　信仰で繋がれた作者夫婦と舅姑との睦まじさが、静かに伝わってきます。〈祈禱書とミシンを持ちて板葺きの官舎にひとり嫁ぎ来し姑〉〈「聖パウロ」ちちの付けたる名を負ひて息は白髪の歴史家となりぬ〉など、歳月を思わせます。

桑原　それでは**山崎洋子さんの「春も失ふ」**について大西さんお願いします。

大西　闘病詠は他にもたくさんあり、事柄を順に述べてゆく日記風の作品が多いなか、この作品は詩に昇華できていると思いました。「花一匁」「ガリバー」「ベネチアの仮面ゾンビ」「因数分解」「空母」等々、見立てに様々な工夫があります。タイトルとなった〈如月と弥生と卯月と乳房とを、令和四年は春も失ふ〉など終盤の作品には、心を揺さぶられる魂

があり、「命」について考えさせられました。

桑原　ありがとうございました。これで九位までの作品について終わりました。最後に十位以下の作品で、注目した作品があれば述べてください。

十位以下の作品について

津金　はい。では、まず**樋田由美さんの「その下に居る」**について述べます。外界のものとの違和感というモチーフを、ひたすら歌い上げています。荒削りで幼さも見受けられますが、それがまた魅力ともなっています。〈頂上に着くのが少し悲しくて　螺旋階段最後のいちだん〉〈歩いてる真夏の街を　本当は無関心というブリザードの中〉など特に心惹かれましたね。〈梔子はいつも優しい夕まぐれ　泣いてもいいか君の前だけ〉の問いかける姿勢にも個性が出ています。

桑原　私も注目した作品です。良質で繊細な感性が感じられる一連です。ただ残念だったのは、ほとんどの作品のどこかに一字空きがあって、全体で見ると大きな疵になっているところです。一字空きの持つ効果は確かにありますが、それはせいぜい十首中二首ぐらいまでの頻度に抑えたかったですね。一首一首を見ればとてもいいだけに、実に惜しい一連でした。

桑原　続いて**内藤丈子さんの「アフガンの蝶」**について述べます。地元越前の春の歌に挟み込む形で、アフガンにて非業の死を遂げた中村哲氏へのオマージュが主題の一連です。〈昆虫を愛でて筑紫の山駆けし少年なりきと中村哲氏〉〈アフガンの蝶に惹かれし哲医師はヒンズークシュへ若き日をゆく〉〈パミールの雪山をとぶ蝶にのり天に還るや〈カカ・ムラド〉逝く〉などとあるように、中村医師とアフガンとの関わりを、あまり知られていない視点から歌ったところに注目しました。一連の構成も緻密にくふうされていて、その点でも意欲を感じました。ただ、やはり説明調の歌も多くて評価が伸びなかったようですね。ある程度説明の必要なテーマを選ぶと、どうしてもそうなってしまう傾向がありますので、注意なさるといいかと思います。

大野　五位に推した**末広芳子さんの「五十鈴川の鴨」**について述べます。近辺の豊かな自然詠から入りながらも具体的数字が入り、背景が見えやすく仕上がっています。故郷の妹、亡き母や夫との思い出など、独り暮らしの静かな日常が淡々と詠まれます。〈桙杉の幹に青苔てんてんと生ひたりひとりぐらし十年〉は真っ直ぐに伸びる杉に苔が生える様子に、ご自身の老いも重なります。〈わが漬けし瓜の粕漬け陽にすかし翡翠の色とほめくれし母〉は具体が効いて母の表情まで浮かんできました。〈たなばたのゆふべをひとり乾杯すスーパードライをグラスに満たし〉など飲食を楽しむ歌も差し込まれ、気持ちの良い読後感でした。

次に、**都甲真紗子さんの「過ぎてゆく日々」**は七位に推しました。この賞の常連である都甲さんは白寿を迎えられました。外出もままならない体調の中で、〈サクランボふくらむ頬が染まりをり籠もり居ながく庭に出ぬ間に〉〈何用で庭に来しかとうろうろす足元にふれし草など抜きて〉庭の木々や草花に注ぐ温かい眼差しを自己に引き付けて詠み、ユーモアも感じられます。時事詠も理性的に、自己の命を見つめながらも肩の力が抜け

た前向きさが印象的な一連でした。

桑原　ありがとうございました。そろそろ紙数も尽きようとしていますので、一覧表に載っている稲吉裕子さんの「白馬ヴィヴァルディ」、山口照子さんの「揃ひの指輪」、北条忠政さんの「大祖・鎌倉北条氏」、栗山由利さんの「去つてゆく夏」、秋野愛実さんの「鳥」は、残念ながら評をしていただく余裕がありません。それぞれ魅力のある作品で、ここに掲載するだけになってしまいましたが、これをもって讃えたいと思います。

　このあと皆さんから今回の選考を終えて感じたことを総評として話していただき、誰を受賞者として推すかも述べてください。どなたからでも結構です。

選考を終えて

津金　斎藤美衣さんを一位に推すことにしたいと思います。

　上位の作品については、個々のコメントにあったように、それぞれ手を入れるべきところはありますが、作者皆さんの個性が発揮されていて、圧倒的な大きな差はないように見受けられました。

　三十首という枠はふだんなかなかない機会なので、やはり一定のモチーフやテーマを持っている方が、読後感に強く訴えかけてくるものがありますね。高齢の方たちは病気や体の不調、比較的若い世代は出口の見えない社会情勢の中での生き辛さを詠むことが多いように思えました。ただ表現が詩的に高められていないと、一種の押しつけがましさを感じたのも事実です。その意味では私性を控えた水辺さん、奥さんのような連作がもっと試みられてもよいのではないか、と思ったりもしました。

大西　「詩に昇華」できているか、と度々述べました。上位にあげた作品は、素材というより詠み方が巧いのです。何を詠むかあれこれ悩むより、目の前のものをどう詠むか、上位作品から学んで欲しいと思います。

　私も、今回の受賞者として斎藤さんを推すことに賛成です。

大野　私は連作の組み立て方、読後に作品のテーマ性が印象深く残る作品かどうかを重視しました。作品評で述べたように斎藤さんの作品には、もどかしさはあるものの、核となる思いには強固なものが感じられます。四名とも高得点の斎藤作品が受賞作に相応しいと思います。

桑原　みなさま、ありがとうございました。それでは斎藤美衣さんを今年の受賞者として推薦いたしましょう。今年の応募作で、前出の一覧表に載っていない作品の中にも注目した力作がたくさんありました。こういう機会を利用して、自分の作品の可能性を拡げていこうとすることは大切なことと思います。また来年の挑戦をお待ちしております。これまで尻込みしてこられた方も、自分を励ます意味で挑戦なさったらいかがでしょうか。それではこれで選考座談会を終わります。

（似顔絵＝水上比呂美）